



Data

監督・脚本：ロベルト・シュヴェンケ

出演：マックス・フーバツヒャー／ミラン・ペシエル／フレデリック・ラウ／ベルント・ヘルシャー／ワルデマー・コプス／アレクサンダー・フェーリング／ブリッタ・ハンメルシュタイン

👁️👁️ みどころ

『チャップリンの独裁者』（40年）は歴史的名作だが、独裁者に大きい、小さいがあるの？ヒトラーはドイツ全体の独裁者からヨーロッパ全体の“大きな独裁者”を目指したが、本作は？

大日本帝国陸軍では脱走兵など例外中の例外だが、ドイツ国防軍では？部隊にはぐれた兵と脱走兵の区別は？脱走兵を收容する“收容所”の機能とは？

今年も2月24日にはアカデミー賞が発表されるが、脱走兵がナチス将校の軍服を着た後の大尉役になり切ったヘロルトの演技やヘロルト親衛隊の隊長としての演技は、アカデミー賞主演男優賞もの！これならホントの独裁者にもなれそうだ。

明智光秀は3日天下で終わったが、ヘロルト独裁はいつまで？そして、みじめな脱走兵から“小さな独裁者”まで見事に変身したヘロルトの末路は？

「彼らは私たちで、私たちは彼らだ。過去は現在なのだ。」というロベルト・シュヴェンケ監督の問題提起を、しっかり受けとめたい。



■□■あれは作り話。しかし、これは大部分がホントの話！■□■

誰もが認める、かつての名作中の名作に、チャールズ・チャップリンが監督し主演した『チャップリンの独裁者』（40年）がある。これは、第一次世界大戦に従軍し、負傷して記憶を喪失したユダヤ人の床屋が、何年かぶりで街に帰って来たところ、独裁者のヒンケルと間違えられる物語で、彼の最期のすばらしい演説がいつまでも心に残る名作だった。しかし、そんなストーリーの同作は当然ながらホンモノのヒトラーの独裁に反対するチャップリンの脚本に基づく作り話！それに対し、原題は『Der Hauptmann』、英題は『The Captain』ながら、邦題を『ちいさな独裁者』とした本作は、大部分がホントの話だ。ヴ

イリー・ヘロルト上等兵（マックス・フーバツヒャー）は脱走兵ながら、たまたま道端にうち捨てられていた車両からナチス将校の軍服を発見し、その軍服を身につけたところで、突如大変身！ヘロルト大尉になり切る中で、次第に「小さな独裁者」になっていく物語だ。

“独裁者”の前に、“ちいさな”という形容詞がつけられたのは、2つの意味がある。その1つは、ヒトラーはドイツ全体をナチス党の支配下に置き、ドイツ全体の独裁者になったのに対し、ヘロルトは独裁者になったものの、彼が組織し権力をふるった「ヘロルト親衛隊」は最大でも80名前後の小さな組織に過ぎなかったため。もう1つは、ヘロルトが小柄で身長が低かったから、その外見的な意味のためだ。タイトルだけ聞くと、『チャップリンの独裁者』の方がホントの話で、『ちいさな独裁者』の方が作り話のように思えるが、実は逆。それを踏まえた上で、この際、是非両作の対比を！

■□■ 迫力ある冒頭シーンは半分ホント！半分作り話！ ■□■

本作は、汚れた顔をくしゃくしゃにしながら必死に走るヘロルト上等兵の姿から始まる。彼はなぜそんなに必死で走っているの？それは、車に乗ったユンカー大尉（アレクサンダー・フェーリング）率いる部隊が、銃を撃ちながらヘロルトを追いかけけているためだ。人間の足ではいくら必死に走っても、追いかけてくる車に負けるのは当然だが、山道に入れば話は別。また、たまたまうまく身を隠せる場所を見つかることができれば、ひょっとして追跡部隊を捲くことができるかも……。しかし、この追跡劇はわざと逃がしたうえで、猟犬が獲物を追うように脱走兵狩りを楽しんでいるものだということがわかると、それを逃げおおすのは所詮無理。このように、本作冒頭では迫力ある脱走と追跡のシーケンスを楽しむことができるが、実はこれは作り話だ。

つまり、実話ではヘロルトは脱走兵ではなく、単に部隊からはぐれただけらしい。もっとも、ヘロルトが部隊からはぐれたのはドイツ敗北の数週間前のことで、1945年4月3日にドイツの無人地帯を一人できまよい歩いている中で打ち捨てられていた軍の車両を見つけたのはホントの話らしい。また、その車の中にあつた将校のトランクに勲章や将校の位を示す記章が入っており、鉄十字章も含まれていたのがホントの話なら、ヘロルトがその軍服を着て大尉になりましたのもホントの話らしい。なお、本作ではヘロルトの身長が低かったため、その将校の軍服がピッタリ合わなかったことがその後の面白いストーリー形成の要素になっているが、それはホントの話か作り話かはもうどうでもいいだろう。このように本作はホントの話と作り話がまぜこぜになっているが、映画ではそれはどうでもいいこと。面白ければそれでオーケーだ。

■□■ どこまでヘロルト大尉になり切れる？ ■□■

大尉の軍服を着てすっかりナチス将校になりきり、演説の真似ごと（？）をしていたヘロルトの前に、突然1人の脱走兵と思われるフライターク上等兵（ミラン・ペシエル）が現れたから、ヘロルトはビックリ。ところが、ヘロルトが声を出す前に立派な将校姿のヘロルトを見たフライタークの方から、敬礼をした上で、「部隊からはぐれました。お供させ

てください。」と申し出たから、さあヘロルトはどうするの？

『帰ってきたヒトラー』(15年)の導入部では、タイムスリップして現代に降臨してきたヒトラーが、「ヒトラーのそっくりさん」となり、「ヒトラーのそっくりさんが現代のドイツを闊歩する」と題したテレビ番組で大活躍をした(『シネマ 38』155頁)が、本作ではフライタークからホンモノの大尉に間違えられたことに自信を得たヘロルトが、その後すっかりヘロルト大尉になり切る命懸けの演技を見せることになるので、それに注目！「ヒトラーのそっくりさん」はヒトラーその人だからそっくりなのは当然だが、前述した『チャップリンの独裁者』では独裁者ヒンケルに間違えられたそっくりさんはユダヤ人の床屋だったから、それがバレればアウト！そんな危険な状況は、本作のヘロルトも同様だが、さあヘロルト上等兵は以降どこまでヘロルト大尉になり切れるの・・・？

■□■役者やのう！何ともお見事な“演技”に敬服！■□■

年間約200本の映画を観て、その評論を書く生活を続けていると、俳優という仕事がいかに大変かと、それがいかに面白いかの両方がわかってくる。そこでの坂和流の最大の誉め言葉は「役者やのう！」だが、私は『チャップリンの独裁者』におけるチャールズ・チャップリンの名演技と同じように、本作中盤でヘロルト大尉になり切り、インチキ大尉を演じきった俳優マックス・フーバツヒャーに「役者やのう！」の賛辞を捧げたい。

フライターク上等兵は、向こうの方から勝手に軍服だけでヘロルトをホンモノのナチス将校と信じてくれたから、フライタークを運転手として従わせることは容易だった。また、小さな村の酒場で腹ごしらえをする中で、店主の求めに応じて略奪者を射殺するのも、将校の軍服を着ていれば容易だった。しかし、その翌日立ち寄った農家では、粗暴な兵士キピンスキー(フレデリック・ラウ)とそのゴロツキ仲間がどんちゃん騒ぎを繰り広げていたから大変。そこで、ヘロルトは「私は後方の動勢を調べている。」と架空の任務をでっち上げたが、海千山千の脱走兵らしいキピンスキーがそれを信じたのか否かは不明だ。むしろ、ヘロルトの身長に軍服の長さが合っていないことを見抜いたキピンスキーは、「こいつはインチキ将校だ」と気付いたのでは・・・？

しかし、そこで大事なことは互いに真実を述べ合うことではなく、互いの身の安全を図ること。頭の回転の速いキピンスキーは「この際、この大尉殿に従った方が安全だ」と判断したらしい。また、急速にプロの俳優にもなれそうなほどの演技力を身につけてきたヘロルトが「ウソでもこのまま大尉役を演じ続けた方が安全だ」と判断したのも賢明だ。その結果、ヘロルトはキピンスキーたちの軍隊手帳に“ヘロルト親衛隊”という新しい配属先を記した上、その後も次々と部下を増やしながら移動を続けることに。しかし、ヘロルト親衛隊にこの先何が待っているのかは全く不明。運を天に任せて移動していると、次に出会ったのは、間の悪いことに脱走兵を取り締まる憲兵隊だ。ヘロルト親衛隊がインチキなことは誰よりもヘロルト自身が知っていることだが、ここはハッキリでごまかす他なし。そうハラをくくったヘロルト大尉の、アカデミー賞主演男優賞にも相当する(?)何とも

見事なハッタリの演技を堪能したい。さらに、その演技力は、逃げ惑うヘロルトを猟犬のように追い回した、あのコンカー大尉と将校姿で対峙した時にも発揮される。コンカーは「どこかで見た顔だが・・・」と不審そうな目で考え込んだが、さあ、そこでのヘロルト大尉の切り返しは・・・？

■□■収容所に驚き！脱走兵の多さに驚き！あなたなら？■□■

本作前半は、ヘロルト上等兵がヘロルト大尉になり切る演技がハイライトだが、後半のハイライトは、荒野にぽつんと建つ粗末な“収容所”を舞台とする権力闘争と“簡易裁判（即決裁判）”による何ともむごたらしい大量処刑のストーリーになる。本作でまず私が驚いたのは、ドイツ国防軍の中にこれほど多くの“脱走兵”がいること。戦争の中で部隊とはぐれた兵士が生まれるのはやむを得ないが、それが次々と脱走兵になることはかつての日本陸軍では考えられないことだ。それは、仲代達矢主演の『人間の条件』6部作や、勝新太郎の『兵隊ヤクザ』シリーズ、さらには岡本喜八監督、佐藤允主演の『独立愚連隊』シリーズ等を見ればよくわかる。日本陸軍で脱走が成立したのは、山本薩夫監督の『戦争と人間』第2部と第3部で、吉永小百合が演じた伍代順子の恋人だった山本圭扮する標耕平くらいのもの(?)だ。

日本陸軍では「脱走は銃殺」と定められていたことや、世界一厳しい軍律があったことの意味を、ドイツ国防軍の脱走兵の多さを見て再確認！また、本作に見る“収容所”が、そんなドイツ国防軍の脱走兵や不服従、不品行を咎められた兵士を収容する施設だということも驚きだ。さらに、私にとって興味深いのは、彼らは軍法のみには則って即“銃殺”とされるのではなく、司法の裁きを受けなければならないということだ。その点、やはりヨーロッパ流の“法の支配”という考え方はすごい。そんな法的原理に忠実なのがハンゼン収容所長（ウルデマー・コプス）だが、警備隊長のシュッテ（ベルント・ヘルシャー）は、収容所が囚人たちであふれかえっている現状の中でもそんなクソ面倒臭い法的手続に固執するハンゼンに苛立っていた。そのため、彼は司法手続によらない現場での“簡易裁判（即決裁判）”を訴えていた。この訴えは何度もハンゼン所長から却下されていたが、新たに収容所に到着したヘロルト親衛隊のヘロルト大尉はシュッテに賛同し、ハンゼンと直談判。見事な交渉術でゲシュタポから“全権委任”を取り付けたからすごい。すごいのはその交渉術のみならず、囚人処刑の効率的な実行力だった。即決裁判にしても、一人ずつ死刑判決を下し、一人ずつ銃殺していくのがルールだが、さてヘロルト大尉による即決裁判と刑の執行方法とは？スクリーン上に見る虐殺シーンだけでも相当なものだが、ホントのホントはもっと残酷なものだったらいい。

しかし、自分も脱走兵のはずのヘロルトが、なぜ同じ境遇の多くの脱走兵＝囚人たちに対してこんな残酷な仕打ちを・・・？ロベルト・シュヴェンケ監督は本作で「彼らは私たちだ。私たちは彼らだ。過去は現在なのだ。」という鋭い問題提起をしているが、もしあなたがヘロルト大尉だったら・・・？

■□■明智光秀は3日天下！ヘロルト独裁はいつまで？■□■

ヘロルト上等兵が将校の軍服を身につけたのは、1945年4月3日。数十名の規模になったヘロルト親衛隊が収容所に到着したのは、4月11日。そして、翌12日の夜が更ける頃には、即決裁判によって約90名の兵士（四人）が処刑されたようだ。そんな状況下で登場するのは、連合軍による収容所の爆撃シーン。考えてみれば、ナチスドイツは敗戦直前に至っているのだから、これは当然のことだ。

これにて、ヘロルト親衛隊もやむを得ず解散！そう思っていると、何の何の、ヘロルトはしぶとい。その後、ヘロルト大尉は生き残った“部下”を引き連れて1台のトラックを巡回する即決裁判所に仕立て上げ、ヘロルト親衛隊の権威を武器に、ある町で次々と犯罪をでっち上げて容疑者を逮捕、処刑していく荒ワザと無法ぶりを発揮する。そんなヘロルト達だから、町の中では酒も女も手当たり次第だ。

さあ、そんなヘロルト独裁はいつまで続くの？ちなみに、織田信長を本能寺で討ち取った明智光秀の天下は3日で終わってしまったが、さてヘロルト独裁はいつまで・・・？

■□■独裁者の末路は？本作では少し消化不良気味！■□■

ヒトラーモノの名作は多いが、独裁者ヒトラーの末路は『ヒトラー最後の12日間』（04年）（『シネマ8』292頁）を観ればよくわかる。本作では、ある町で“即決裁判”を武器に狼藉のかぎりを尽くしていたヘロルト親衛隊も、ついにドイツ軍事警察の手によって逮捕されることになる。それが、4月28日のことだから、ヘロルト独裁が続いたのは結局1ヶ月足らずだ。ここで私がわからないのは、ゲシュタポは有名だが、本作中盤に登場したドイツの憲兵隊やラストに登場するドイツ軍事警察のこと。これらの部署の連携はどうなっているの？どうやらヒトラー独裁が貫かれていたナチスドイツでも、今の日本と同じように“縦割り行政”の弊害があったらしい。

それはともかく、ドイツ軍事警察に逮捕されたヘロルトにも、弁護士付きの裁判が保証されていたから、これにもビックリ。パンフレットにある「ヴィリー・ヘロルトの人生」によれば、「ヘロルトが拘束されている間に赤軍がベルリンに到達してヒトラーは自殺。」したらしい。本作のスクリーン上でも、弁護人は「ヘロルトのやったことはけしからんことだが、彼の能力は大したもので、大いに役に立つ」という趣旨の弁論をぶっていたが、同解説には続いて、「ヘロルトは自らの行為を認め、裁判によって釈放された。」と書かれていたからビックリ！ひょっとして、ヘロルトはヒトラー亡き後、その後を継いでナチスを建て直したの？そんなワケがないのは、歴史をみれば明らかだが、同解説によれば、「ヘロルトの物語はイギリスの軍事法廷で明かされることになった。」そうだから、アレレ・・・。

もともと、本作はその点を全く描かず、それなりの字幕で処理しているが、それは一体なぜ？私にはこれはちょっと消化不良！私としては、ヘロルト親衛隊を率いて1ヶ月も権勢を振るい続けたこの独裁者の末路を、もう少し丁寧に見せてほしかったが・・・。

2019（平成31）年2月22日記